SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

30年前の回想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々倉, 航三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005895

30年前の回想

佐々倉　航三

今から30年程前のこと、私の中学時代のことでありました。当時経済哲学の权威として知られた故左右田喜一郎博士が私達の中学へ口演に来られたことがあったのです。まだ紅顔の少年であった私は温容悠々としてせまらず，所謂貴公子然とした博士の風格に深くみせられながらも、博士の口もとをみつけて話に聞きいったことを覚えています。"校長さんの話によるとこの学校の生徒はみな秀才ぞろいだそうだから今日は一寸理窟をこねてみましょう"と冒頭されましたが，やがてカントの実践理性批判の結論にある名句"それについてしばしば且つ持続して沈潜熟考すればするほどますます新たに増し来る讃嘆と畏敬とをもって心情をみたす二つのものがある――わたしの上なる星空とわたしの内なる道徳律とがそれである"（天野貞祐　訳）がカントの墓石に刻まれていることを博士は穏かに和かに厳かに語られたのでありました。まことにそれは私にとっては天籟のように思えたのです。

たしか左右田博士は"それを思えば思うほど益々不思議なものが二つある……"というように言われたと記憶しますがなんというすばらしい詞でありましょうか、まことに私達自然科学に精進するもの丶態度乃至心境はまさにカントのこの言葉のようでありたいと念じています。深く究めれば究めるほど大自然の摂理に対する驚異、不思議さはいよいよつのるばかりでありますが、私達は又一方日夜良心の鏡に自己をうつして反省し，真人間たらしめ給えと神に祈らなければなるまいと思います。このカントの言葉の意義は特に自然科学者にとっては所謂座右の銘ともなすべきものでありませう。

地学教室からも有為の方々が夫々の道へ向って巣出度巣立ってゆかれますがどうぞ学問のぼけ者になりさがらぬよう，お互にまず真人間たるべきことを常に念じてゆきたいと思います。